

第 51 回目 主にあつて強くあれ (6)

はじめに

●今回取り上げる神の武具は、五番目の「救いのかぶと」(I テサロニケ 5:8 では「救いの望みのかぶと」)という武具です。この「救いのかぶと」をかぶることによって、敵の策略から私たちは守られるのです。では、「救いのかぶと」とはいったいどんな武具なのでしょう。結論を先に言ってしまうと、「救いのかぶと」とは、神によって「栄光と誉れの冠」「御恵みの冠」「恵みとあわれみとの冠」をかぶせられた者たちの気づきであり、敵への見せつけです。さらに、より積極的に、自分が神に愛され、神に喜ばれている存在であることを敵に見せつけるという武具なのです。

●「かぶと」と訳された語彙と「冠」と訳された語彙は全く異なる語彙です。前者は戦いのための神の武具としての語彙であり、「冠」はそれをかぶる者の地位を表わす語彙だということです。

1. かぶる者の地位を表わすかぶり物(冠、かぶと)

(1) かぶり物の意味

●前回は「信仰の大盾」ということで、「大盾」のイメージを学びました。足から首ほどある大きな盾、首から下の全身を覆う盾によって敵が放つ火矢を消すことができます。しかし首から上、顔、頭の部分は、敵の様子をうかがう場合にはどうしても出さなくてはなりません。そのとき、そこに火矢が当たっては困ります。「ご命中」と言ってはられません。特に、頭は全身の最も重要な部分です。そこがやられてしまつてはならないので、神様はその部分を守る「かぶと」を与えてくださるのです。この神の武具を私たちがかぶらなければ敵に負けてしまいます。ところで、この「救いのかぶと」とはいったいどんな武具なのでしょう。



●その前に、さまざまなかぶり物について見てみましょう。

王冠(王様の冠)、日本の貴族がかぶっていた「かぶり物」、兵士たちがかぶる「かぶと」の類—北欧、ローマの兵士、そして大祭司がかぶっていた「かぶり物」。冠、かぶと、大祭司のかぶり物は、単に、頭を守るためではありません。それをかぶる者の身分を表わしています。中国などではその階級を形だけでなく、六色の色によってわけていたそうです。つまり、ここで言おうとしていることは、「かぶり物」(ヘルメット)は、単に、頭を守るためのものではなく、それをかぶっている者の地位を見せつけるものだということです。

(2) 聖書におけるかぶり物としての冠

●ところで、聖書には、神の愛する者たち、神を信頼する者たちにかぶせられた冠があります。その冠もいろいろ

אגרת שאול אל האפסים

るな形容詞がついた表現が多く見られます。いくつか紹介したいと思います。

①「あなたは、人を神よりいっくら劣るものとし、これに**栄光と誉れの冠**をかぶらせました。」(詩篇 8:5)

②「あなたは、その年に、**御恵みの冠**をかぶらせ、あなたの通られた跡にはあぶらがしたたっています。」

(詩篇 65: 11)

③「あなたのいのちを穴から贖い、あなたに**恵みとあわれみとの冠**をかぶらせ」(詩篇 103: 4)

④「(兵士たちは) イエスに紫の衣を着せ、**いばらの冠**を編んでかぶらせ、」(マルコ 15:17)

⑤「試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、

いのちの冠を受けるからです。」(ヤコブ 1: 12)

●以上のように、私たちは、神によって、「栄光と誉れの冠」「御恵みの冠」「恵みとあわれみとの冠」をかぶせられた者たちなのです。つまり、その冠をかぶせられた者たちは、いやがおうにも、神の栄光と誉れ、恵みとあわれみを目立たせる存在なのです。それほどに私たちは神にとって尊い存在だということなのです。だれが私たちにそんな冠をかぶらせてくれるでしょうか。

●ところが、聖書には不思議な冠が出てきます。それは御子イエシュアが人間によってかぶせられた「**いばらの冠**」

です。これはとげのついた木の枝を編んで作られたもので、それを頭にかぶせられただけで血が流れ出してしまいます。いばらの冠—それは、まさに人が神に対してかぶせた辱めの冠であり、それは同時に、人間の罪深さを表わすものでもあります。しかし、やがてこの「**いばらの冠**」をかぶせられた御子イエシュアが、御父によって死からよみがえらされて、天においては、その頭に多くの王冠が与えられているのを黙示録の中に記しています。(ヨハネ黙示録 19 章 12 節参照)

●そうした事実のゆえに、聖書にはこう書かれています。

「試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、**いのちの冠**—決して朽ちることのない永遠のいのちの冠—を受けるからです。」(ヤコブ 1: 12) と。「栄光と誉れの冠」「御恵みの冠」「恵みとあわれみとの冠」、そして朽ちることのない「**いのちの冠**」をキリストにあってかぶせられた者であることを敵に見せつけるのが、今回の「救いのかぶとをかぶる」という意味なのです。あなたはどんな冠を頭にかぶっていますでしょうか。ご機嫌を損ねた「おかんむり」という冠だけはかぶってほしくないです。敵であるサタンは、私たちが神によってそのような存在であることに気づいてほしくないのです。知ってほしくないのです。なぜなら、それを知ることによって、サタンが私たちが支配できなくなるからです。

2. 律法主義的信仰から恵みによる信仰へ

(1) 今は、恵みの時

●さて、私たちが神によってかぶせられている冠(兵士たちでいうならば「かぶと」と表現されます)は、「御恵みの冠」「恵みとあわれみとの冠」だということをもっと突っ込んでみたいと思います。それは私たちの信仰が、律法主義的信仰であってならないことを教えていると信じます。つまり、恵みによる信仰に立ち続けることがなければ、私たちのヘッドに敵の火矢が撃ち込まれて、死にはしませんが、神の恵みの支配の中で生きるというこ

とがよくわからない、つまり本当の救いがわからないクリスチャンにされてしまうのです。これは敵の戦略です。使徒パウロは、ローマ人への手紙の中で次のようにはっきりと述べています。「あなたがたは、律法の下ではなく、恵みの下にある」と(6章 14節)。

●クリスチャンは律法に対して終止符が打たれており、「律法から解放された」ということです。それは、私たちがキリストとしっかりと結ばれ、御霊の助けによって多くの実を結ぶようになるためなのです。これが恵みです。パウロが「確かに(間違いなく)、今は恵みの時、救いの日です。」(Ⅱコリント 6章)と言ったのは、神の恵みを無駄にしないように生きるためなのです。つまり、キリストにあって、神が私たちにかぶせてくださった「栄光と誉れの冠」「御恵みの冠」「恵みとあわれみとの冠」を無駄にしないようにするためです。この冠は私たちを謙遜な者にするはずです。なぜなら、この冠は私たちの一切の努力を介しないからです。頑張りや努力といった要素の入り込む隙が(余地が)一切ないからです。

●「救いのかぶと」は、換言するならば、「恵みによる救いという冠」をはっきりと敵に見せつけることなのです。しかも、その「恵みの栄冠」は、神の子どもとされた者たち、神の王子、神の王女たちのしるしとして与えられるにふさわしいものです。この栄冠をキリストをとおして与えられているのです。このことを信じて、日々感謝しているならば、あなたは敵の攻撃に敗れることはないのです。とはいえ、クリスチャンもまた、さまざまなことで落ち込んだり、自信をなくしたりします。しかし、自分が神の子どもとされているということをはっきりと自覚している人は、それによってそこから立ち上がることができます。たとえ、人からばかにされたり、見下されたりしたとしても、あるいは、自分で自分を駄目だと思ふようなことがあっても、健全なセルフ・イメージに立ち返ることができます。

●多くの人は、人に認められようとして必死に努力し、パフォーマンスすることによってセルフ・イメージを保とうとして、疲れ果てたり、自分を人の目に良く見せようとして自分を偽るようになって、しまいには、平安を失ってしまうのです。しかし、自分が、ただ神の恵みによって神の子どもとされたということ、確信している人は、セルフ・イメージを保つための無駄な努力から解放されます。謙虚な心で、神の子の身分をあらわす「恵みの栄冠」という「救いのかぶと」を神から受け取る人はほんとうに幸いです。

(2) 信仰生活の二つのタイプ

●ところで、同じくキリストを信じているクリスチャンであっても、その信仰生活には以下のように、二つのタイプがあります。ひとつは、「律法主義的な信仰」、もう一つは「恵みによる信仰」です。このふたつは、実際には、はっきり分かれているというよりも、一部分が重なっていることが多いように思います。

●私たちの文化は、何をなしえたか、何ができるか、ということで評価されることが多いと思います。オリンピックでもメダルを取れたか、取れなかったか、それがとてもなにか重要なことであるかのように報道されています。前回の北京オリンピックは国の威信をかけて行われたといわれます。つまり、中国がメダルを取るために、国が威信をかけて、多くのお金を注ぎ込んで、選手を育てて強化したということです。日本でもソフトボールで金メダルをとりましたが、そのためにかかった費用は数億円だそうです。オリンピックがこのように国がらみになってくると、国と国との戦いになってしまい、選手たちはそのために利用される存在となります。これはオリ

אגרת שאול אל האפסים

ンピックの精神を著しく損なうものとなると懸念する声が上がっています。私たち日本の社会にも、小さい頃から努力することを求められています。ですから「あきらめちゃダメ、やめてはならない、達成するまで頑張っやり続けなさい」と教え込まれます。「がんばってねー」が口ぐせです。特に、このような価値観の強いアメリカなどでは敗北、あるいは失敗、挫折することは言葉では表現できないくらいの痛みが伴うようです。ですから、特に、牧師になっても多くの牧師たちがやめていくそうです。私たちの努力や熱心さえあれば成功すると信じているならば、そのようにならないときに、失望やスランプに陥りやっいていけなくなるからです。

●頑張れば必ず良い結果を生み出せるという信仰、これが「律法主義的信仰」です。もちろん信仰ですから、神の存在は無視されてはいないのですが、いや、むしろ熱心なほどに神を求めているのですが、それは成功するのを助けてくれる神になっているのです。霊的な原則では、祈りにおいても、奉仕においても、なにか神のために熱心に頑張ることは、むしろ害を及ぼし、頑張れば頑張るほど惨めな結果を刈り取るのです。神が与えようとしている本当の安息を得ることなく、挫折感と罪責感にさいなまれるのです。

●律法主義的信仰の特徴は、クリスチャンとはこうあるべきという理想像をもって、それに自分を合わせようとして努力している人です。しかし、理想と現実のギャップを自分の努力や頑張りによって埋めることは決してできないのです。この泥沼から果たして勝利することができるのか、然りです。それが「恵みによる信仰」によってなのです。それは、神のために何かを行い、何がしかの結果を生み出すという努力はしないということです。神はそんなことは期待しておられないということを悟った信仰です。熱心な働きや頑張りではなく、キリストのうちに憩うという安らぎを経験することです。これが神が喜ばれることです。つまり、私たちが神のために、あるいはキリストのために何を行い、何を生み出しているかというのは、律法主義の罫であり、サタンの策略だということです。神の祝福は、すべてキリストの中にあります。それゆえ、私たちがすべきことは、このキリストを知り、キリストのうちにとどまり、キリストの中に憩うことなのです。

●「キリストのために何かをする、しなければならない」という信仰から、「キリストにあって生きる」という信仰つまり「行ない」から、イエス・キリストという方に焦点を当てることなのです。キリスト教の信仰は、神のための働きから、イエス・キリストという方に焦点を合わせてかかわることです。そこから神のすべてがはじまっていくからです。

●神様が私たちをお救いになったのは、神のために何かをするためにお救いになったものではありません。私たちが救われたのは、神との日々の交わりの中で親しく知るようになるためなのです。主との親しい交わりの結果として、主は私たちを通してご自身を現わされます。自然に神のいのちを流されていきます。ところが、これは神への奉仕で忙しくすればするほど困難になります。心は満たされなくなります。マリアのように、キリストのもとに身をおいて安らぐこと—これが、「救いのかぶと」をかぶることです。

●最後に、このことを教えている大切な聖書のテキストを読みたいと思います。

【新改訳改訂第3版】ルカの福音書 10 章 38～42 節

38 さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村に入られると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。

אגרת שאול אל האפסים

39 彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。

40 ところが、マルタは、いろいろともてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。

「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」

41 主は答えて言われた。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。」

42 しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。

彼女からそれを取り上げてはいけません。」

◆ここに見られる「マルタとマリヤの信仰の型」を決して軽く扱ってはなりません。当教会で強調している信仰のグレート・テキストです。このテキストにある「**どうしても必要なことは、ただ一つだけです。**」ということばに注目してください。「**一つのこと**」だけが強調されています。One Thing です。この One Thing を大切にしていともマリヤのように日々生きること—これが「救いのかぶと」をかぶることの意味であると信じます。これは、いのちの本質を追求したダビデのライフスタイルだったのです。このことを最も深い意味で理解し、そこに自分を置くことを身につけなければなりません。そして神を楽しむのです。神を喜びとし、神の救いを楽しむのです。ここから神の力はあふれ流れてきます。

●とはいえ、サタンの声が響いてきます。「そんな呑気なことをしているから、日本のクリスチャン人口は 1% の壁を破ることができないのです。日本のリバイバルのために、あなたはもっともっと(これが律法主義です)、熱心に、祈り、伝道して、主に仕えていくべきです。おおいに頑張って主をあかししていくべきです」と駆り立てる声です。「あなたが、呑気に主と交わっている間に、多くの魂が救われず、滅びていっているのですよ」と煽ります。そして私たちがもっと熱心に祈り、もっと熱心に伝道しないから現状はこうなんです・・とクリスチャンたちを責めるように追い込みます。そして罪責感と挫折感にさいなまれるように仕向けようとします。これが敵の罠です。敵の策略です。もし、私たちが敵のあおりに耳を貸すならば、確実に、主との親しい交わりから遠ざけられていきます。そして大切ないのちを見失うでしょう。ここに、私たちが神の武具として備えられている「救いのかぶと」をかぶる必要があるのです。